

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol.17 平成12年度 No.1 平成12年 7月28日

編集発行：日本国際理解教育学会事務局

〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1 目白大学内 TEL & FAX：03-5983-8132

## 目 次

国際理解教育学会第10回大会報告
平成12年度実践研究会案内
平成12年度総会報告
平成11年度決算報告・平成12年度予算書
理事会・常任理事会報告
寄贈文献・図書
論文紹介
新入会員及び会員異動
お知らせ
事務局からのお願い

## 国際理解教育学会第10回大会報告

第10大会実行委員長：田淵 五十生

第10回大会は、6月10日（土）、11日（日）の両日、奈良教育大学を会場にして開催され、140名を超える参加者が討議を深めた。

大会に先立ち、岩本廣美、川端末人、岡崎裕の諸氏を中心にして現地実行委員会が組織され、公開シンポジウムのテーマや提案者が決定されて大会の骨子が作成された。

「国際理解教育で『総合的な学習』をどう創るか ―国際理解教育の実践の理論化と理論の実践化をめざして―」というテーマで公開シンポジウムが持たれたが、一般参加者を含めた150名が熱心に耳を傾けた。

シンポジウムでは、梶田叡一氏より「国際理解教育と総合的な学習」というテーマで基調講演を受け、それに応える形で、渡邊千影（高）、武部公也（中）、西上寿一（小）の3氏の提案者から実践に根ざした報告が行われた。そして、佐藤部衛、古川治、渡部淳の諸氏の指定討論者から、実践の中から国際理解教育の共有財産を確認する議論が行われた。

また、二日目に「地球時代における『国』と人々」というテーマで、宇土泰寛氏をコーディネーターにして、特定課題研究のシンポジウムが持たれたが、このテーマは昨年一貫して掲げられたものである。提案者は、市川博美、泉貴之、斎藤護、藤原孝章の諸氏であった。さらに、自由研究発表も35件に達し、8会場に分かれて熱心に討議された。

今大会の特徴は、地域の市民グループの自由研究発表や大会運営における積極的な参加を得たことである。特に、懇親会では、地域の外国籍住民との交流を進めている「ナラ・ファミリー&フレンド」の協力をえて、インド、タイ、フィリピン、ペルー、ボリビアなどのエスニック料理を賞味したり、韓国やペルーなどの民族舞踏に触れたりする機会が持てた。

以下に、本大会のプログラムを記すが、大会の司会や総会の運営に関わってくださった理事や会員各位にあらためて謝意したい。

## ◆第10回大会プログラム

<6月10日(土) 午前の部>

- ・自由研究発表Ⅰ 司会：千葉果弘(国際基督教大学)・田川寿一(広島市立己斐小学校)
  1. アメリカの多文化音楽教育における世界音楽の学習の位置づけ—P.S.キャンベルの多文化音楽教育論をめくって—  
磯田三津子(東京学芸大学大学院)
  2. 教師の趣味を生かした「総合的な学習の時間」 江崎広章(千葉県大栄町立川上小学校)
  3. 実践研究・黒澤明監督「七人の侍」を観る 樋口信也(帝京大学)
  4. 「存在する外国人」を目指して—小学校における国際理解教育—  
乾まゆみ(奈良県天王寺町立大寺小学校)、池口澄子(奈良県天王寺町立大寺小学校)、岡田明世(奈良県天王寺町立大寺小学校)、中川恵美(奈良県天王寺町立大寺小学校)
- ・自由研究発表Ⅱ 司会：星村平和(帝京大学)・佐々木かな子(京都両洋高校)
  1. オリジナルなワークショップ作成のすすめ—参加型体験学習の広がりのために— 河合千尋(関西国際高等専修学校)
  2. 姉妹都市間における教育新聞 勝保得男(静岡県御殿場市立南中学校)
  3. 異文化との出会いと自己形成—学びの出会いと相互理解に生かす学習活動の実践から—  
小嶋祐二郎(広島県廿日市市立野坂中学校)
  4. グローバル教育から総合学習へ—カリキュラムの共同開発の可能性—  
小関一也(早稲田大学)、石川一喜(グローバル教育・西東京センター)
- ・自由研究発表Ⅲ 司会：島久代(前千葉大学)、井上星児(広島大学)
  1. 異なる他者を理解し、共に生きるための基礎的資質や能力の育成—地域・学校との交流とワークショップを通しての実践—  
久保田美和(千葉大学附属小学校)
  2. 学校で広がる国際理解プログラムと民間支援—実践活動例より— 仲川順子(地球市民フォーラムなら)
  3. 多文化共生を目指した協動的実践研究—「地球子供教室」における日本語学習を通して—  
宇土泰寛(東京都港区立三光小学校)、玉井裕子(横浜・児童生徒の為の日本語教育研究会)、  
長谷川朋美(横浜国立大学大学院)
- ・自由研究発表Ⅳ 司会：中村幸士郎(山口大学)・二宮皓(広島大学)
  1. グローバルクラスでの学びとは何だったのか?—演劇的手法を用いた教育実践の意味— 高尾隆(一橋大学大学院)
  2. グローバルリテラシーへ向けての英語教材開発 浅川和也(東海学園女子短期大学)、佐藤涼子(神奈川大学)
  3. 外国語コミュニケーション能力の理論的概念 服部孝彦(大妻女子大学)
  4. 国際理解教育と英語教育をリンクさせよう!—小学校における「総合的な学習の時間」の中で—  
伊藤弥香(松香フォニックス研究所)、金澤延美(駒沢女子短期大学)

<6月10日(土) 午後の部>

### ・公開シンポジウム

全体テーマ：『国際理解教育で「総合的な学習」をどう創るか—国際理解教育の実践と理論化と理論の実践をめざして—』

コーディネーター：米田 伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所)、田淵五十生(奈良教育大学)

基調講演：梶田 叡一(京都ノートルダム女子大学学長) 「国際理解教育と総合的学習」

提案者：渡邊 千景(私立桐朋女子高等学校) 「“(日韓米の3か国の生徒による)グローバル・クラス”の授業—教員の資質として求められたもの—」

武部 公也(神奈川県茅ヶ崎市円蔵高等学校) 「“総合的学習の時間”の活動を通して」

西上 寿一(奈良県河合町立河合第一小学校) 「同じ時代を生きる子供たち—対立・難民・平和—」

指定討論者：佐藤 郡衛(東京学芸大学海外子女教育センター)

古川 治(大阪府箕面市立止々呂美中学校)

渡部 淳(国際基督教大学高等学校)

<6月11日(日) 午前の部>

- ・自由研究発表Ⅴ 司会：多田孝志(目白学園高等学校)、柴田 元(大阪府立豊島高等学校)
  1. 高等教育における国際理解教育—「世界学」と「グローバルクラスルーム」の実践を通して—  
落葉典雄(奈良女子大学附属中等教育学校)
  2. 学校の国際統合—「新国際学校」での教員相互の国際理解に関する経験を踏まえて— 野島大輔(千里国際学園中・高等学校)
  3. 多文化主義の視点からの世界史学習—「大西洋世界」を例として— 田尻信市(筑波大学附属高等学校)
  4. アイデンティティ確立のための多文化理解—学校授業としての取り組み—  
大見泰子(大阪YMCA国際専門学校国際高等課程)
  5. 高校生を対象にした「フォト・メッセージコンテスト」と国際理解教育  
米田伸次(帝塚山学院大学)、中野佳代子(国際文化フォーラム)

- ・自由研究発表VI 司会：安藤益代（日本国際交流振興会）・辻野 功（京都造形芸術大学）
  1. 小学校における国際交流の展開と地域社会の支援—兵庫県粟粟郡波賀町における事例を通して—  
岩本廣美（奈良教育大学）、田淵 仁（静岡県新居町立新居小学校）
  2. 「アジア教育国際会議」の開催について—意図・主旨への理解を求めて— 井嶋 悠（千里国際学園中・高等学校）
  3. 留学生の異文化適応—学習態度・意欲とビリーフ・システムについて— 辻井清吾（トリブヴァン大学）
  4. 豪州日本語教師アシスタント・プログラムの現状と展望—新しい長期滞在型異文化研修の可能性を探る—  
佐藤昭治（一橋大学大学院）
  5. Homestay Program について—教育的価値と問題点— 横瀬弘幸（筑波女子大学）
- ・自由研究発表VII 司会：二谷貞夫（上越教育大学）・古橋政子（白鳳女子短期大学）
  1. 対話を通して—一人一人の自立した主体性を育てる国際理解教育— 服部久美子（神戸市立こうべ小学校）
  2. 中国帰国者3世の自立と支援—4人のエスノグラフィーを通して—  
田淵五十生（奈良教育大学）、藤井健太（奈良教育大学大学院）
  3. 1970年前後の大阪における朝鮮人教育の語りの変換— 倉石一郎（京都造形芸術大学）
  4. 日本人のセルフ・エスティームの意味構造— 野崎志帆（大阪大学大学院）
  5. 偏差値重視の受験教育から「Self Esteem」重視の教育へ— 小泉 毅（兵庫大学短期大学部）
- ・自由研究発表VIII 司会：相良憲昭（国立教育研究所）、嶺井明子（筑波大学）
  1. 国際理解教育の基礎理論の構築— 佐々木 文（広島大学大学院）
  2. グローバリズムの限界と国際理解教育の課題— 岡崎 裕（大阪市立此花総合高等学校）
  3. 転換期国際理解教育のパラダイムに関する考察— 川端末人
  4. 多文化共生、平和教育学の探求—授業「国際理解教育」の名かで平和をどのように取り上げたか— 寺島隆吉（岐阜大学）

<6月11日（日）午後の部>

・特定課題研究

全体テーマ：『地球時代における「国」と人々—国際理解教育における新たな視点からの「国」の学習について—』

コーディネーター・司会者：宇土泰寛（東京都港区立三光小学校）

課題提起者1：市川博美（長野県 NPO センター） 「一校一國運動の成果と課題」

課題提起者2：泉 貫久（専修大学松戸高校） 「多角的・多面的にとらえる国の学習—ニュージーランドを事例にして—」

課題提起者3：斎藤 護（東京都杉並区立高井戸小学校） 「イスラム文明の中のサウジアラビア王国」

課題提起者4：藤原孝章（富山大学） 「国際理解教育における“国”の取り上げ方について」

◆第10回大会参加者感想

■大会に参加して

◇玉井 裕子（横浜・児童生徒のための日本語教育研究会）

私は今年に入って、国際理解教育学会に入会を許されるとともに、第10回大会で共同研究発表の場をいただきました。日本語教育という立場から子どもや学校に関わり始めてからわずか4年ほどでこのような機会を得られたのは、まったくもって幸運でした。自由研究発表では、東京都港区立三光小学校の宇土泰寛先生、横浜国立大学大学院の長谷川朋美さんとともに、「多文化共生を目指した協働的実践研究」をテーマに、日本語学習を通じた多文化共生の方向性について発表させていただきました。この実践研究は、宇土先生の多大なるご指導、ご協力と、長谷川さんをはじめとする若い人たちのパワーに支えられて成り立ってきたのですが、今回、大会に参加して、このような研究発表をする場があること自体に、大きな可能性があることに改めて気付かされました。その可能性の第一は、参加されていたすべての方が、個々の研究課題や実践を我がものとし、問題を共有化しようとする姿勢に溢れていたことです。第二に、参加者が現職の教師のみならず、研究者、学生、地域ボランティアと幅広かったことです。そして第三は国際理解教育に向かおうとする姿勢が、もはや従来の教育の枠組みを超えたところで捉えられていたことです。これらは、大きな組織になるとなかなか共有していけないものです。それが学会内で成立しつつあることは、何よりも価値があることと思います。反面、実践研究と基礎研究、理論などの相互作用をどう進めるか、また、とすれば肥大化する国際理解教育のテーマの中で、個々の会員がどのように自己とその研究を位置づけていけばよいのかという点では、私自身も含め、まだ課題が多いように思いました。それは、特定課題研究において扱った「国」に対する意識の問題とも関係します。「個」をどう捉えるのか、「国」とは「世界」の中における一つの「個」なのか、個人、地域、民族などの集合体なのか。帰属するとは何に対してか。日本語教育の視点で言えば、「国語」とは何かという問題もあります。かつて私が住んだオランダでは、EU統合を見据えた論議が盛んになされていました。統合が成った今、オランダの人は「国」について、自己と自国とについてどう語るだろうか、そんなことまでも考えました。

今大会に参加して、個人的にも多くの示唆を得、課題を認識できました。今後とも皆様にご指導を賜りつつ学んでいきたいと思っております。よろしく願いいたします。最後に、準備、進行にご尽力下さった大会準備委員会の皆様にあつく御礼を申し上げます。

#### ◇野島 大輔（千里国際学園中等部・高等部）

本学会がその目的を達成するためには、（１）会員数の広がり（２）学問水準の維持、の２つの柱が必要であると思われる。（１）の方は総会でなされたご報告によると極めて順調とのこと、「国際理解教育」への関心度が低かった時代のことを思うと、まったく素晴らしい歩みであると思われる。今後はますます「質」や、大会に参加した会員の「参加感」がさらに充実したものになっていくことについての期待が高まるであろうが、そこで大会のプログラムについてのいくつかの身勝手な提案を、思い付くままに記したい。

- ①討論を更に活発化させるために、各研究発表の後の質疑応答時間をさらに増やす。
- ②全体会ではテーマを絞って「議論」をする。また、数名のパネリストによる「議論」中心のパネル・ディスカッション形式を用いてみる。
- ③忌憚のない意見交換をもたらし素地作りとして、会員の懇親の場（パーティ、食事時間、パフォーマンス見学、参加型学習、新教材の体験ワークショップ等、旧友と改めて語り合ったり、新しい会員と互いに知り合ったりできる場）を、大会のできるだけ前半の部に持ってくる。
- ④会員が当日の興味に応じて小テーマに分かれて討論が出来る「小グループのコーナー」や「ラウンド・テーブル」方式を取り入れてみる。
- ⑤重要なテーマのうち見解が大きく2分されるような題材においては、代表論者数名同士によるディベートを全体会で行う。
- ⑥国際理解教育の初心者の会員が参加しやすい入門的なセミナーを大会のどこかに設けるか、またはそのニーズに適した題材に基づく個別研究発表を集めた部屋を設ける。
- ⑦「個人」重視の観点から、会員の名札の名前を大書き、所属を小書きにする。
- ⑧国際理解教育に携わる非日本語文化にある会員が参加しやすいような部会を、大会の中に最低一つは設ける。
- ⑨海外の国際理解教育の研究者や実践者を招いて、「招聘発表」をしてもらう企画を立ててみる。以上は、大会をどうすればますます活発化させることができるか、と考えながら思い付いた勝手な諸提案である。今後の大会が更に充実したものであることを待ち望んでいる次第である。

#### ■自由研究発表の感想

##### ◇野崎 志保（大阪大学大学院）

限られた時間の中での参加であったため、実際に聞くことのできた数少ない発表の中から、以下の２件の自由研究発表について感想を述べさせていただきます。

まず、理論研究を自らの問題意識に統合させ、実践に反映している例として興味深かったのは、小嶋祐伺郎氏の「異文化との出会いと自己形成～学びの出会いを相互理解に生かす学習活動の実践から～」でした。小嶋氏は、子どものセルフ・エスティームにあえて揺さぶりをかける（自己内葛藤）「学びの出会い」を設定することによって自己理解が深まることに着眼し、中学校における地域福祉問題の学習における、子どもの社会参加への意欲と「生き方」への考察を引き出す実践を報告されていました。その中では、報告者の鋭い観察眼によって子どもの自己内葛藤が自己再統合に至るまでのダイナミックな変容プロセスが描き出されており、今後の実践報告にとって示唆に富むものであったように思います。

このような葛藤に働きかける取り組みには、本報告のような子どもの「生き方」選択にまで関わる実践から、偏見や固定概念を崩し複眼的思考を育てる実践までさまざまなレベルが考えられます。教師がもつ「子どもの可能性への信念」が子どもに影響を与える本報告のような実践は、教師自身の資質に負うところが少なくないと言えるかもしれません。しかしながら、同時にこのような子どもの葛藤と変容は、学校における人間関係や環境においては、極めて日常的に生起しうる「教育的な営み」でもあるように思われます。上記に述べたような目的のレベルの異なりとの関わりで、どの程度まで体系的かつ意図的な「仕掛け」が可能であるか（またはその限界についても）を整理することが、理論と実践の統合に向けての課題なのだと感じました。

また、宇土泰寛氏、玉井裕子氏、長谷川朋美氏による「多文化共生を目指した協働実践研究～『地球子供教室』における日本語学習を通して」は、日本語教育を必要とする児童に対する日本語教育の問題について、新たな視点を提供していたと思われました。

筆者が興味深かったのは、望む望まないに限らず日本社会で生きることになったこのような児童に対し、「日本語教育ができること」として、まずは「言語としての日本語の音のシステムとその表記の方法を伝えること」に焦点を絞り、日本語に対する「言語認知能力」を高めるための実践を行なっている点です。報告者らは、このような子どもたちに「正しい日本語」を一から教えようとする従来の日本語教育の考え方とは異なり、教育対象の社会的背景との関わりで当然発生するはずの日本語教育の限界を認めつつ、それがもつ可能性を試行錯誤し実践していらっしやるようでした。今後は、初期においては母語がその基盤になっているであろう「言語認知能力」の「枠組み」も、最終的に日本語に移行させるのかどうかについて、検討が必要ではないかと思いました。

#### ◇増田 茂（東洋女子短期大学）

数十年ぶりに奈良を訪れ、間近に鹿を見た瞬間、どこかに消え去ろうとしていた過去の思い出と日本の故郷の匂いが甦って、「ああ、この地こそが国際理解の原点か」といった、多少大げさな感傷に浸ることが出来ました。

さて、自由研究発表の件ですが、まずは、困惑のボヤキから申し上げるなら、発表自体は刺激的で参考になったという印象ではありますが、なにせ、発表内容の密度が濃いものを、限られた時間の中で早口に、なんの抑揚もつけずに無表情に棒読みされた場合は、些か苦痛を感じました。どうか、相手のいることをお考えになって、発表方法に工夫してもらいたいものです。

最初から耳障りなことを言って申し訳ありません。しかし、発表内容は素晴らしく、参考にさせて頂きたいものが沢山ありました。その中から、一つだけ取り上げるのなら、私は、奈良女子大学附属の落葉先生の発表に惹かれました。それは、総合学習の時間に関するものでしたが、本時間の新設の理由にしても、基本的枠組みの問題や実践例にしても、当を得たものでした。さらに、「多価値認識」や「相互依存」を中心に据え、聞き取り調査などのアクティビティを通じて自立的な考えや行動を促す国際理解教育のあり方には、疑問を挟む余地がありません。だが、敢えて二点だけ指摘させて頂くなら、第一点は、クリティカル・シンキングの能力を総合的学習の中で養うのは、大いに是とするところですが、その際、児童生徒が、あまりにも行きすぎた自己主張のみの虜になるのを避けるためにも、併せて、複眼的思考の指導への配慮が必要であると考えます。第二点は、図4の国際理解教育の概念図についてですが、私自身、発表者が資料の中で述べている「共生」の道を探る趣旨には異論がありません。ただ、発表者が多価値の存在を、価値相対主義尊重の立場で捉えて、普遍的価値を過小評価しているのか、その辺がわかりません。また、文化の問題にしても、文学、芸術といった狭義の文化と、文化人類学でいうような広義の文化に区別して捉えているのかも不明です。いずれにしても、国を超えて考えなければならない事柄が出てきている時代ですので、価値観を相対主義的立場のみから捉え過ぎると、指導上、落とし穴が待ち受けているような不安を感じます。

以上、勝手なことを並べましたが、総じて、レベルの高い立派な発表が多かったというのが私の感想です。どうも有難うございました。

#### ■特定課題研究の感想

##### ◇山本 真弓（山口大学人文学部）

わたしは、日本以外の国の現地校で学校生活を始めた娘が、日本の小学校に転校してからぶつかったさまざまな疑問を通して、こどもたちに「国」をどういうふうに教えるのがいいかを考えるようになりました。そんな矢先に、桜美林大学の松下達彦氏を通じてこの学会のことを知り、今回、特に「特定課題研究」を目指して初めて参加しました。

はじめに、旧ソ連のパスポートが国籍と民族籍を併記していたという逸話が研究委員会委員長の新井郁男氏より紹介され、そのような新井氏のあいさつに、「国」というものを相対化しようという姿勢が感じられたのが印象的でした。けれども、松下氏が指摘されたように、そのような論者によってもなお、「わたしたち日本人が・・・」だとか、あるいは、わたし自身大変違和感を感じる「わが国が・・・」という言い方が無意識に用いられているというのが、日本の国際理解教育の実態のようにも感じられました。松下氏の指摘を待つまでもなく、日本語を使うのは必ずしも日本人ばかりではないということ、そこには日本生まれ日本育ちの在日外国人をはじめ、さまざまな背景をもつ日本人がいるということは、日本を多様で重層的なものとしてとらえようという視点をもっていればわかるはずのものだからです。

そのようななかで、佐々木氏が行なった質問、すなわち、「国民」として生きるのか、「個人」として生きるのか、といった生き方の問題をどう取り扱うか、という問題提起は、大変興味深いものでした。佐々木氏は昨年度の特定課題研究の感想として、戦争中であっても国家や民族の枠組みを超えた個人の交流がありうるのだということ、ヨーロッパで見聞きした事例をもとに紹介しています。佐々木氏の文章を引用すれば、「国というものについて、漠然と従わなければならないものだと思っている生徒が、どのように国と自分とのつながりを考え、他国の人々とのつながりを考えるか」ということで、佐々木氏は昨年と同じ質問を今年度も繰り返し提起されているわけです。

「国」を相対化するということは、ひとつは、「国」というものの中身は一枚岩ではありえないんだ、ということを実体的に示すということで、そこからは当然、たとえば帰国子女のような非日本的日本人や、在日韓国朝鮮人のような日本の非日本人、あるいは両親のいずれか一方だけが日本人のこどもたちの存在に目を向けなければならないでしょう。そうすると、そういった人びとにとって、「国民」として生きるということ、どういうことなのでしょう。

もうひとつは、「国」はなくなることもあるし、新しく生まれることもあるけれども、そういった「国」の生死にかわりなく、大地は揺るがないし、人は生きつづけるんだということ認識することではないでしょうか。これは、前日のシンポジウムで報告された、テーマとしての難民という問題にもつながるものでしょうし、無国籍者の存在を認識することにもつながると思います。

最後に、わたし自身の問いかけとして、「お金」を「国」とどのように結びつけるかということが、話題になりました。日本社会そのものが、相変わらず経済成長を絶対的価値として動いているなかで、「お金」で買えないものの価値、「お金」で買ってはいけないものが存在することの意味、について、どのようにこどもたちに伝えていくかということを取

きにしては、先進国 vs 発展途上国という図式からは抜け出せないように感じており、個人的には学校と家庭の連携の必要性を感じています。

#### ◇服部 孝彦（大妻女子大学、ミュレー州立大学）

昨年の大会も特定課題研究として「国」が取り上げられたが、私は都合で参加することができなかったため、今大会の特定課題研究は楽しみにしていた。

私が初めて国を意識したのは、小学生の頃に海外に出かけ、入国の際に日本国のパスポートが必要であった時である。そして、それからの長い海外生活を通して、自分は日本人であるという意識を強く持った。今でも一年に4～5回は海外に出るが、その際はなるべく国籍などは問わないという考えをするように努力しているが、やはり日本という国を意識している自分に気づくことがある。このように日本を意識することができるのは、日本という国が消えてなくなることがないという考えが前提にあってのことだが、世界をみると、国そのものが崩壊してしまうこともありえる。また、国よりはむしろ地域を意識している人もいれば、文化圏を意識している人もいる。

私が今までに海外で出会った人々の中には、国よりも地域や宗教を強く意識している人も多い。日本人の多くは、主権国家の集合として世界をみているといえるが、その考え方を考える必要がある。国際理解教育において、国という視点を学校における実践に結びつけるためには、世界の人々が国に対して、どのような意識を持っているのかということを出発点にする必要がある。

特定課題研究におけるコーディネーターと各課題提起者の話は、それぞれ興味深く聞かせていただいたが、その中でも藤原先生の地球社会化のなかで国際国家をどうとらえるかという政治経済的アプローチと社会学的アプローチは、私の頭の中を整理するのにとても役立った。

私が親しくしている日系、中国系、アフリカ系、ニュージーランド系アメリカ人達は、それぞれ国に対する考え方はまちまちである。特に最近アメリカ国籍を取得したばかりの中国人の友人の意識は複雑であった。また、マイノリティーの気持ちを肌で体験した人間とそうでない人間とでは、国に対する考え方は相当違うものである。

東京に戻る飛行機の都合で、フロアーからの意見を含む終わりの45分の議論を聞くことができず残念であったが、国をどのように扱ったらよいかについてさまざまなことを考えさせられた有意義な時間であった。

#### ◇浅川 和也（東海学園大学人文学部）

「地球時代における国と人々」のシンポジウムを拝聴した。昨年のシンポジウムの発展として、国際理解教育の根幹に切り込む試みである。長野県での冬季オリンピックでの一国一国運動、ニュージーランドやサウジアラビアを取りあげた具体的な課題提起があった。私たちはどれだけ海外との関係を意識化するために身の回りに使われているものを探してみるアクティビティもあるが、そこから国、国家を理解することのきっかけにすることは難しい。オリンピックでふってわいたように自分の学校がある国を応援することになったとしても、普段は意識することのなかった国々に関心を持つことがあってもよい。何らかのきっかけは必要だ。

フィリピンを訪れ、学校を訪問したことがあるが、先生方と話していた時、ナショナリズムという言葉が肯定的な意味で使われたのを思い出す。植民地からの独立、他言語、他民族のなかでの求心性のあらわれなのだとも思う。日本では、ナショナリズムはかつての軍国主義を思い起し、一般に嫌悪感を持たれる場合が多い。しかしながら、国民としての義務を果し、権利の保障を実現していくことが健全な市民社会に求められるように国民であるという事実には厳然である。また、教育は国策である以上、日本人であることを前提とするのであろうが、個人には多様なアイデンティティがあり、グローバル化する地域社会において多様な国理解が求められるものと思われる。

貨幣や切手を手始めとした実践の可能性も示唆されたが、衣食住や風俗習慣を取りあげる異文化理解からでは、人権、環境、開発、平和といった普遍的価値と主権国家との緊張関係は読み解けない。国際理解の実践は多様であるが、昨年、今年のシンポジウムはその多様性を貫く核が必要だとのことからであろう。今後、さまざまな実践研究をあたる際に「国」「国家」がどのように扱われているか気にしてみたい、大きな宿題をいただいたシンポジウムであった。

#### ■公開シンポジウムの感想

##### ◇磯田 三津子（東京学芸大学大学院）

今回の公開シンポジウムは、総合的な学習の時間における国際理解教育のありかたを展望する上で、非常に示唆に富む内容であった。

梶田敏一先生の基調講演は、第一に、国際理解教育は何をめざすべきなのか、第二に、総合的な学習における国際理解教育の活動がいかにあるべきかという2つの観点から発表されたものであった。第一の観点について、梶田先生は、日本人としての自覚をもちつつ、世界の多様な文化を受容することが必要であると提言された。この提言は、国際理解を進める中で、どのように「日本人としての自覚」を育てたらよいかについて改めて考えさせられるものであった。第二の観点については、日本や諸外国の文化についての子どもたちの興味・関心に基づき、自ら課題に取り組む活動を

コーディネイトし、活動をサポートする教師の役割についての認識を深めるものであった。桐朋女子高等学校の渡邊千景先生は、日本・韓国・米国の生徒と3ヶ国の教師からなる「グローバルクラス」の実践について発表された。渡邊先生の発表では、多文化的な状況における異なる文化との「共生」に、外国人との共同活動といった生徒の体験が不可欠であること、そして生徒に対する教師の支援の仕方が重要であることを認識させられた。

武部公也先生は、茅ヶ崎市立円蔵中学校の「総合的な学習の時間」の取り組みについて発表された。当該校では、学校に地域の外国人等を招き、異なる文化を持つ人々と触れあう機会をつくっているという。こうした外国人との出会いは、生徒が日本人としての自分の再認識や、外国の文化への発見へとつながる貴重な体験である。また、地域の人々を学校に受け入れる学校環境づくりや、体験を重視したカリキュラムづくりといった円蔵中学校の取り組みは、これからの学校のありかたを考える際の重要なモデルとなるであろう。

河合町立河合第一小学校の西上寿一先生は「難民問題」をテーマとして西上先生自身が取り組まれた実践を発表された。西上先生の実践は、難民が生じる背景などについての知識を得る学習を経て、さらに募金やバザーといった難民支援を行う活動に発展させている。子どもたちが学習を通して得た知識が難民支援という実際の活動に生かされている点が西上先生の実践の重要な部分である。この発表は、子どもたちが学校で得た知識を生活や社会に生かすことの大切さを示したものであった。

シンポジウムの後半では、「体験」を中心とした活動について幾つかの議論が行われた。こうした議論からは、国際理解教育として意味のある体験とはどのようなものなのか、総合的な学習で国際理解を実践を展開する上での体験の質や内容に関する課題について考えさせられた。

## 平成12年度実践研究会案内

平成12年度の実践研究委員会では次のように2回の実践研究会の開催を予定していますので、ご参加をお待ちしています。なお、両方の実践研究会とも期日が近づきましたら、改めて案内状をお送りします。

第1回 平成12年11月15日(水) 目白学園中学・高等学校

第2回 平成13年2月4日(日) 熊本市

今回は11月の研究会の概要をお知らせします。

今回の実践研究会は中学・高校での各教科の特性を生かした国際理解教育の授業を公開し、それを手がかりに今後の国際理解教育の実践の方向を討議していきます。また、国際理解教育の教材開発から授業実践にいたるまでプロセスを具体的に検討いたします。多数の方々にご参加くださいますようお願い申し上げます。

- 1 日時 平成12(2000)年11月15日(水)
- 2 場所 目白学園中学・高等学校  
〒161-8539 東京都新宿区中落合 4-31-1 TEL03-5996-3132 FAX03-5996-3066
- 3 日程 10:30 受付  
11:10 公開授業(中・高校の授業をすべての教科で実施する予定)  
各授業では教科の特色を生かした国際理解教育の実践を公開します。  
小学校での実践の参考となり、また総合的な学習の推進のてがかりともなる内容です。  
13:00 実践検討会  
公開された授業を素材に国際理解教育の今後の方向について具体的な討議をしたいと思えます。多用な角度からの率直な話し合いにより論議を深めたいと思えます。  
14:20 実践討論会  
さまざまな立場の方々の意見をいただきながら、教材開発から授業プロセス作成までの過程を具体的に検討していきます。  
16:20 全体会

大会申し込み方法、公開授業の内容につきましては、二次案内(10月頃予定)で詳細をお知らせいたします。

## 平成12年度総会報告

日時：平成12年年6月10日 13時15分～14時15分

会場：奈良教育大学1号館

一、開会 事務局長の中西副会長より開会の挨拶があった。

一、会長挨拶 天城会長より開会の挨拶があった。

一、第10回大会実行委員長挨拶 田淵五十生大会実行委員長より歓迎の言葉があった。

一、議長団・書記選出

議長に森茂岳雄会員及び古橋政子会員を、書記に岡崎裕会員を選出した。

一、審議事項

1. 1999年度事業報告 事務局長より資料1に沿って平成11年度の学会の事業報告があった。

2. 1999年度会計決算報告 事務局長より資料2により決算報告があり、雑収入に関する質疑があった。

3. 1999年度会計監査報告 桑ヶ谷森男監事及び藤澤院監事より、すべてが適正に処理されていた旨が報告された。

以上の案件について賛成多数により可決された。

4. 日本国際理解教育学会規約改正の件

川端副会長より、改正案提案に至る経緯と改正点について資料5の原案が示され、①副会長1名、②事務局長を新設する、③役員定年制を設け70歳とする、④顧問を新設する、が主な改正点である旨の説明があった。

これについて運用面での質疑応答の後、細目については理事会で決めることとして可決された。

5. 2000年度事業計画案審議

事務局長より資料3により事業計画の提案があり、可決された。

6. 2000年度予算案審議

事務局長より資料4により予算案の提案があり、可決された。

7. 第11回大会開催の件

次年度第11回大会は平成13年6月9日、10日の両日筑波大学で開催の提案があり、可決された。

続いて実行委員長の嶺井明子理事より挨拶があった。

8. その他

川端副会長より学会の一層の発展のための方策を会員より求める発言があった。

一、閉会

## 理事会・常任理事会報告

### ◆平成11年度第2回常任理事会議事録

日時：平成12年3月26日（日）午後1時30分～4時40分

場所：目白学園女子短期大学会議室

出席者：天城、天野、新井、宇土、川端、島、多田、田淵、中島、星村、米田、中西

I. 報告事項

1. 第10回大会の準備状況

○田淵大会準備委員長より資料1による説明があった。司会者は千葉早弘氏、井上星児氏を除き既に交渉済みであること、後援は奈良県教育委員会、奈良県国際理解教育研究会、JICA等に依頼したことが報告された。

○自由研究の発表者は学会員に限られるが、共同研究者のある場合には会員以外の氏名も掲載することを可とした。なお、共同研究の発表者にはプログラム中に○印をつけることとした。

2. 紀要第6号の編集状況

渡部理事欠席のため、資料6による進行状況が中西理事から報告された。

3. 第2回想話会の結果について

資料6による報告があった。なお、今後は主催者を明確にし、予算規模を講じることとした。

これについては次回の理事会で審議することとした。

4. ヴィジョン検討委員会の活動状況並びにアンケート調査結果とその関連で提起された意見

川端理事から今年度の活動状況と資料8によるアンケート調査結果の報告があった。

5. 平成11年度予算の執行状況

中西理事から資料2により執行状況の報告があった。



## II. 審議事項

### 1. 研究委員会

新井理事及び宇土理事から資料7により第10回大会の「特定課題研究」の説明があり、それに基づいて活発な討議があった。主な意見は次のものである。

- 視点とアプローチを分かりやすく整理して提示する必要がある。
- 解説が難しいので参加者に分かりやすく説明して欲しい。
- 文明と文化、国際文化、環境なども論じないといけないのではないのか。

### 2. ヴィジョン検討委員会

川端理事からヴィジョン検討委員会の検討の結果として、次の(1)(2)の提案があり審議した。

#### (1) 学会役員の定年制および顧問制について

- ・ 役員の定年を70歳とし、次期理事選挙より実施する。
- ・ 顧問を若干名置く。

これに対する主な意見

- ・ 定年制は学会としてはなじまないが、新陳代謝を図り役員人事を活性化する必要がある。
- ・ 規約の役員のところにある副会長2名を1名とし、その代わりに事務局長1名を置く。
- ・ 定年制など具体化に必要な措置は、選挙監理委員会等で検討する。

これらの提案はいずれも了承され、それらは規約改正の必要があり、川端理事が原案を作成することとした。

#### (2) 学会の中・長期計画における研究推進並びに監理運営の問題について

- ・ 地域毎の学会員の研究会を推進する必要がある。
- ・ 小中高の国際理解教育カリキュラムの開発をする。
- ・ 従来の学会の組織運営を見直す必要がある。
- ・ 他団体からの研究プロジェクトの申し入れについて手続規定を設ける必要がある。

これらについては異議なく了承された。

#### (3) この他、学会員である大学院生相互の意見交換の機会を促進するようにしたいとの提案があり、奈良教育大学での大会から実施することが了承された。

### 3. 実践研究会

多田理事より資料3に基づいて提案があり、了承された。なお、研究会のうち〈地方〉での研究会は米田理事より平成13年2月11日に熊本で開催したい旨の提案があり了承した。これらに関する予算措置は実践研究委員会で検討し、改めて提案することとした。

### 4. 事務局

#### (1) 平成12年度予算について

中西理事より次年度予算には、役員選挙費、事務局移転費、APNIEVEの年会費が計上されることが報告された。また、未解決のスタディツアーの引率費補助について審議したい旨の発議があったが、国際委員会で検討し、改めて提案することとした。

また、予算を編成上、各委員会より希望する予算額を中西理事に知らせることとした。

#### (2) 会費未納者の処置

資料4の3年間にわたる16名の年会費未納者について、退会の意思の有無を再確認の上処置することが提案され了承された。

### 5. 新入会員審査

資料4による入会申込者を承認した。なお、近藤真理子氏については在学名を問い合わせることとした。

### 6. 次回理事会の予定

奈良教育大学で大会前夜の6月9日(金)午後5時または6時より開くこととした。

### 7. その他

- ・ 資料5の『2000年グローバル教育サマーセミナー』の後援依頼については主催者が学会員であることから異議なく了承した。
- ・ 佐藤郡衛理事が多忙のため常任理事を辞退したい旨の申し出がありこれを了承した。
- ・ 平成13年度の第11回大会は筑波大学を会場校とし、嶺井明子理事を大会準備委員長とすることが提案され了承された。第11回大会は平成13年6月9日(土)～10日(日)に開催される予定である。

## ◆平成12年度 第1回理事会議事録

日時：平成12年6月9日(金) 17:00～20:00

場所：奈良教育大学教育実践総合センター会議室

出席者：天城勲、天野正治、新井郁男、安藤益代、宇土泰寛、川端末人、相良憲昭、佐藤郡衛、島久代、田淵五十生、千葉泉弘、中島章夫、中西晃、中村幸士郎、樋口信也、星村平和、嶺井明子、米田伸次、渡部淳、委任状提出者5名(大津和子、岡田真樹子、多田孝志、永井滋郎、光田明正)、桑ヶ谷森男監事(決算監査報告のため出席を求めた)

## I. 報告事項

### 1. 第10回大会について

田淵理事より参加申し込み状況、自由研究発表、発表会場等についての報告と説明があり発表抄録が配布された。院生懇話会の時間設定及び趣旨についての説明があった。

### 2. 国際委員会より

千葉理事より5月3日～5日までAPNIEVE 総会が行われ、会長は留任、副会長に相良憲昭理事が選出されたこと、及びアジア太平洋国際教育地域センター（韓国に設置）が8月末に発足する旨の報告があった。

### 3. 平成11年度の新入会員と退会会員について

中西理事より11年度の入会者は69名、退会者は34名（内会費未納退会者は14名）である旨の報告があった。

## II. 審議事項

### 1. 平成11年度事業について

中西理事より11年度の事業報告（資料1）があり、若干の文言についての修正の上承認された。

### 2. 平成11年度会計決算報告と監査報告

中西理事より決算報告（資料2）、続いて桑ヶ谷監事から監査結果の報告があり、承認された。

### 3. 平成12年度事業について

#### (1) 各委員会の事業等

1) 研究委員会 新井理事及び宇土理事より資料9による説明があった。これに対する主な意見は、

① 学会としての研究を推進する体制を検討すべきである。

② 特定課題研究について、その趣旨に則し遅くとも12月の理事会に諮り決定されたい。

2) 実践研究委員会 米田理事より資料（資料番号なし）に基づいて年度計画の説明があり了承された。

3) 国際委員会 千葉理事より8月実施予定の中国スタディ・ツアーには12名と現地で3名の参加者がある旨報告があった。なお、費用負担については次期役員に引き継いで検討することとした。

4) ヴィジョン検討委員会 川端理事より委員会名を例えば企画委員会に改名したほうが良いとの考えが示されたが、次期役員に引き継ぐことにした。

以上の問題を含めて、学会の組織の再検討を次期役員に申し送ることとした。

#### (2) 役員選挙・事務局移転

1) 役員選挙は12年末に実施する。定年制導入が決定された場合は、役員選挙に関する実施方法を早急に検討する。

2) 事務局移転については移転先を早急に検討し、理事会に提案することとした。

### 4. 平成12年度予算案について

中西理事より12年度予算案（資料4）の提案があり審議の上了承された。

### 5. 学会役員の定年制と顧問制及び規約改正について

川端理事より理事アンケート調査結果（資料6-1, 6-2）の説明があり、定年制や顧問制を設ける等の規約改正案（資料5）の提案があった。審議の結果、若干の修正の上承認された。

### 6. 平成12年度総会次第について

事務局より資料7による総会次第の提案があり、了承された。

### 7. 次期大会について

平成13年度第11回大会を筑波大学にて平成13年6月9日～10日で開催することが承認され、実行委員長の嶺井明子理事より挨拶があった。

### 8. 新入会員審査

資料8の5名の入会希望者について審議の上承認された。

### 9. その他

#### ① 後援依頼について

開発教育協議会主催の「第18回開発教育全国研究集会」8月4日～6日（立教大学）の後援依頼を了承した。

② 紀要2号から5号までの在庫が多数あるため、大学の授業等で使用する場合、格安で頒布することが提案され了承された。

③ 懇話会の開催については、世話役は本年度も渡部理事にお願いすることとした。

④ 各委員会で委員やメンバーを追加する場合は、理事会に諮ることを申し合わせた。

⑤ 学会事務局を手伝う坂田頭一君は、原則として火曜日と木曜日の午前10時から午後5時まで勤務するが、その他の曜日でも事務局に留守電ないしファックスで連絡すれば、用件は中西まで即日届くようになっているとの報告があった。

⑥ 事務局から期日を指定し各種の連絡をした場合、その期日を厳守されたいとの要望があった。

平成11年度決算報告と平成12年度予算案

◆平成11年度 日本国際理解教育学会収支決算書(平成11年4月1日～平成12年3月31日)

I. 収入の部

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
入会金	150,000	198,000	48,000	3,000×66名
年会費	3,600,000	3,161,624	△438,376	401名
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	200,000	197,401	△2,599	理事からの国際会議分担金・紀要・報告書販売
当期収入合計(A)	5,950,000	5,557,025	△392,975	
前期繰越収支差額	168,622	168,622	0	
収入合計(B)	6,118,622	5,725,647	△392,975	

II. 支出の部

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	備 考
<b>1. 事業費</b>	3,100,000	2,867,131	232,869	
大会運営補助費	500,000	500,000	0	12年度大会用
紀要編集委員会費	300,000	224,784	75,216	6号編集費
実践研究委員会費	300,000	220,546	79,454	
研究委員会費	300,000	330,000	△30,000	
国際委員会費	200,000	200,000	0	
ビジョン検討委員会費	100,000	100,111	△111	
紀要刊行費	1,000,000	1,000,000	0	5号刊行費
会報刊行費	200,000	108,990	91,010	15,16号発行費
会員名簿刊行費	200,000	182,700	17,300	
<b>2. 管理費</b>	2,660,000	2,184,285	475,715	
人件費	1,200,000	778,040	421,960	アルバイト費
事務局運営費	200,000	166,605	33,395	電話・コピー
通信費	400,000	464,480	△64,480	
設備・備品費	100,000	67,231	32,769	
消耗品費	300,000	216,471	83,529	
会議費	50,000	84,349	△34,349	
旅費交通費	400,000	269,000	131,000	
雑費	10,000	138,109	△128,109	
<b>3. 予備費</b>	358,622	0		
当期支出合計(C)	6,118,622	5,051,416	1,067,206	
当期支出差額(A)-(C)	△168,622	505,609	△336,987	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	674,231	△674,231	

◆平成12年度 日本国際理解教育学会収支予算書 (平成12年4月1日から平成13年3月31日まで)

I. 収入の部

単位(円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
入会金	210,000	150,000	60,000	3,000×70名
年会費	3,600,000	3,600,000	0	8,000×450名
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	200,000	200,000	0	紀要・報告書販売他
当期収入合計(A)	6,010,000	5,950,000	60,000	
前期繰越収支差額	674,231	168,622	505,609	
収入合計(B)	6,684,231	6,118,622	565,609	

II. 支出の部

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
<b>1. 事業費</b>	<b>3,180,000</b>	<b>3,100,000</b>	<b>80,000</b>	
大会運営補助費	500,000	500,000	0	13年度大会用
紀要編集委員会費	300,000	300,000	0	7号編集費
実践研究委員会費	400,000	300,000	100,000	
研究委員会費	350,000	300,000	50,000	
国際委員会費	280,000	200,000	80,000	
ビジョン検討委員会費	150,000	100,000	50,000	
紀要刊行費	1,000,000	1,000,000	0	6号刊行費
会報刊行費	200,000	200,000	0	17,18号発行
名簿刊行費	0	200,000	△200,000	
<b>3. 管理費</b>	<b>2,910,000</b>	<b>2,660,000</b>	<b>250,000</b>	
人件費	1,100,000	1,200,000	△100,000	アルバイト費
事務局運営費	200,000	200,000	0	電話・コピー
通信費	500,000	400,000	100,000	
設備・備品費	50,000	100,000	△50,000	
消耗品費	300,000	300,000	0	
会議費	100,000	50,000	50,000	
旅費交通費	400,000	400,000	0	
雑費	10,000	10,000	0	
事務局移転費	100,000	0	100,000	
役員選挙費	150,000	0	150,000	
<b>3. 予備費</b>	<b>594,231</b>	<b>358,622</b>	<b>235,609</b>	
当期支出合計(C)	6,684,231	6,118,622	565,609	
当期支出差額(A)-(C)	△674,231	△168,622	△505,609	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	0	0	

寄 贈 文 献 ・ 図 書

◆会員の図書・文献寄贈

次の図書や文献が学会に寄贈されましたが、この場をかりて御礼するとともに、お知らせします。

○藤沢皖著『はばたけ若き地球市民—国際学園の教育実践から—』アカデミア出版会

○エヌ・アンド・エス企画『きみにもできる国際交流』第2期・7巻(イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア・ニュージーランド、フィリピン、フィジー・トンガ・サモア、ケニア)、偕成社

- 帝塚山学院大学国際理解研究所『国際理解』31号
- 帝塚山学院大学国際理解研究所報 第12号
- 筑波大学比較・国際教育研究室紀要 第8号
- 熊本県立教育センター研究紀要 第8集
- 大阪市教育センター研究紀要 第100号
- 大阪市教育センター研究紀要 第112号
- 大阪市教育センター研究紀要 第130号
- 大阪市教育センター研究紀要 第138号
- 多田孝志著『「地球時代」の教育とは?』岩波書店
- 日本教育学会『教育学研究 第67巻 第2号』
- 異文化間教育学会『異文化間教育14』

## 論文紹介

### ◆修士論文紹介

高尾 隆 (一橋大学大学院) 『日本の演劇的手法を用いた教育実践における学びとは何か』  
 (今回よりこの会報で、大学生や院生の国際理解教育関係の論文を紹介することにいたします。指導された教官や学生からのお知らせをお待ちします。氏名、論文名、学校名を併記してお知らせ下さい。)

## 新入会員・退会会員及び会員異動

### ◆新入会会員

以下の20名の方が平成12年1月から7月の間に入会しました。

氏名	所属		連絡先
芥川 愛子	名古屋大学大学院	468-0021	愛知県名古屋市天白区天白町平針住宅8-96
粟谷 昌史	熊本県立教育センター	860-0878	熊本県熊本市清水町兎谷360-433
石川 一喜	グローバル教育・西東京センター	182-0005	東京都調布市東つつじヶ丘2-27-12 千龍コーポ206
乾 まゆみ	奈良県王寺町立王寺小学校	636-0803	奈良県生駒郡三郷町東信貴ヶ丘1-7-31
犬飼 俊明	奈良県王寺町立王寺小学校	636-0803	奈良県生駒郡三郷町東信貴ヶ丘1-7-31
内田 千秋	大阪府立北淀高等学校	562-0023	大阪府箕面市粟生間谷西4-2-5-201
大泉 千花	松阪市教育研究所	515-0104	松阪市高須町2920
大東 郁子	東洋英和女子大学大学院	166-0004	東京都杉並区阿佐谷南1-6-20コーポ21 201号
門林 洋子	大阪府立富田林高等学校	586-0041	大阪府河内長野市大師町14-27
河合 千尋	関西国際高等専修学校	634-0051	奈良県橿原市白橿原町5-2-19-302
久保田 美和	千葉大学教育学部附属小学校	261-0011	千葉市美浜区真砂2-14-3-402
近藤 真理子	奈良教育大学大学院	590-0969	大阪府堺市新在家町西1-1-10-1101
瀬戸 千尋	獨協大学大学院	340-0044	埼玉県草加市花栗4-1-47 B-101
中野 佳代子	国際文化フォーラム	163-0726	東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル26F
久井 通義	関西外語専門学校	567-0009	大阪府茨木市山手台7丁目16-3
藤井 健太		708-0825	岡山県津山市志戸部618
松井 克行	兵庫教育大学大学院連合学校	565-0832	大阪府吹田市五月が丘南14-22-501
山中 信幸	柳学園中学・高等学校	656-0013	兵庫県洲本市屋621-14
山本 真弓	山口大学人文学部	753-0058	山口県山口市吉田1677-1
奈良女子大学文学部附属中等教育学校		630-8305	奈良県奈良市東紀寺町1-60-1

### ◆退会会員

次の24名の方が平成11年度で退会しました。

合津郁夫、安部町江、阿部汎克、笛吹紀子、斉藤実、佐野金吾、下河原五郎、白井宏明、菅澤康雄、鈴木洋二、高橋輝、棚橋忠夫、棚橋和正、千葉充、永田栄一、西脇光子、平沢徳、三上信迪、南出新治、宮本節子、村瀬睦、森素子、ワールドファミリー、山田登

また、次の14名の方が自然退会になりました。

伊地知紀子、植田敬三、岡村大、小川輝徳、小澤滋子、金子洋子、小池生夫、小堀辰夫、末永明義、田中美香、谷口茂、松永康文、右田忠史、和田忠征

◆会員名簿の訂正

平成11年7月発行の会員名簿に訂正がありますので、変更をお願いします。

頁	氏名	住所	電話・Fax番号
1頁	浅田孝紀	東京都台東区千束1-9-5-201	
11頁	清水厚美→清水厚実 島久代		03-3267-1041 03-3304-1620(電話) 03-5374-5502(Fax)

◆連絡先移動

次の方々の連絡先や電話番号等が変更になりました。

氏名	連絡先	TEL&FAX	Eメール
會澤壮史	313-0103 茨城県久慈郡金砂郷町下宮河内 800	0294-76-9741	
伊東弥香	194-0041 東京都町田市玉川学園 5-24-46	042-732-8980	<a href="mailto:mika@mpi-j.co.jp">mika@mpi-j.co.jp</a>
乾美紀	658-0064 兵庫県神戸市東灘区鴨子ヶ原 2-4-40-402	078-841-6117	
越智清隆	182-0025 東京都調布市多摩川 3-45-14		
柿沼路夫	241-0814 神奈川県横浜市旭区中沢 1-44-25	045-362-9590	<a href="mailto:mkakinu@attglobal.net">mkakinu@attglobal.net</a>
片山聡彦	310-0912 茨城県水戸市見川 2-81-3B	029-254-3166	
小林亮	257-0002 神奈川県秦野市鶴巻南 5-16-20 ドルチェ芦屋 307		
高尾隆	186-0002 東京都国立市東 2-4 一橋大学院生寮 8	042-576-6330	<a href="mailto:gsd0021@srv.cc.hit-u.ac.jp">gsd0021@srv.cc.hit-u.ac.jp</a>
竹本英代	739-0016 広島県東広島市西条岡町 6-7-102	0824-24-8400	
新里眞男	930-0857 富山県富山市新町 3-5-14	076-439-0335	
野島大輔	565-0824 大阪府吹田市山田西 1-23 A10-110	06-6878-3421	<a href="mailto:Dnojima@senri.ed.jp">Dnojima@senri.ed.jp</a>
福山文子	167-0053 東京都杉並区西荻南 2-12-19	03-5346-5006	<a href="mailto:fayako@mx.b.ttcn.ne.jp">fayako@mx.b.ttcn.ne.jp</a>
松井美帆	216-0003 神奈川県川崎市宮前区有馬 4-3-16-306	044-877-5991	<a href="mailto:mipo@01.246.ne.jp">mipo@01.246.ne.jp</a>
村上博之	275-0006 千葉県習志野市泉町 3-10-8-808	047-473-6306	<a href="mailto:MZR59564@biglobe.ne.jp">MZR59564@biglobe.ne.jp</a>
森茂岳雄	092-0352 東京都八王子市 1936-11	0426-70-3255	
山下博美	788-0013 高知県宿毛市片島 4-52-2		<a href="mailto:globalvnd@aol.com">globalvnd@aol.com</a>

◆所属の変更

次の方々の所属が変更になりました。

氏名	所属	TEL・FAX	Eメール
浅田 孝紀	筑波大学附属坂戸高等学校	03-3873-7060	<a href="mailto:asada@tsukuba.sakado.saitama.jp">asada@tsukuba.sakado.saitama.jp</a>
大堀 哲	常磐大学コミュニティ振興学部	029-232-2990	<a href="mailto:ohori@tokiwa.ac.jp">ohori@tokiwa.ac.jp</a>
柴田 元	大阪府立豊島(てしま)高等学校	06-6849-7651	
妹尾堅一郎	慶應義塾大学知的資産センター	03-3453-0258 03-5540-0558	<a href="mailto:senoh@ipc.keio.ac.jp">senoh@ipc.keio.ac.jp</a>
中池さな恵	足利市立毛野中学校		
三村 隆男	上越教育大学	0225-21-3393	<a href="mailto:mimu36@olive.ocn.ne.jp">mimu36@olive.ocn.ne.jp</a>

現会員数は457名です。

お知らせ

◆公文国際奨学財団より助成金受領のお知らせ

毎年助成を受けております公文国際奨学財団より、本年度も200万円の研究助成金をいただきました。この助成金は紀要刊行等、学会活動において重要な役割をはたしております。この誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

◆紀要編集委員会より

紀要編集委員会では、2001年6月に発行する紀要第7号を学会設立10周年記念号として位置づけ、鋭意企画の検討を進めております。その一環として、5年ぶりに会員の「研究動向」を掲載する予定にしております。つきましては、年内に記入用紙の発送、回収、整理を行いたいと考えておりますので、ご協力方をよろしくお願い申し上げます。

◆日本国際理解教育学会大学院生研究協議会（仮称）の結成についてのお知らせ

発起人 神戸大学大学院 国際協力研究科 博士課程後期 乾 美紀  
広島大学大学院 国際協力研究科 博士課程後期 佐々木 文  
大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 野崎 志帆

私どもは、このたびの学会第10回大会におきまして話し合いをもち、大学院生研究協議会（仮称）を発足させようとの結論に達しました。

この会は、これからの国際理解教育の研究を担う、大学院に在籍する院生を中心とした若手の研究者が、相互の研究を発展・深化させることにより、国際理解教育の発展に寄与することを目的としたいと存じます。

そのため、相互の研究に関する意見の交換、問題関心のある文献・研究資料の所在、その他あらゆる研究上の情報交換の場の設定、及びそのための会員名簿の作成、などを考えております。

つきましては、大学院生、ならびに大学院に在籍された若手の研究者の方々に、本会に参加していただきたく存じますので、上記の趣旨にご賛同いただけます方は、下記の必要事項を明記の上、下記連絡先宛てにE-mailにてご連絡いただきたく存じます。なお、8月31日までにご連絡いただきたく存じます。

ご参加を表明してくださった方々のご意見・ご希望を発起人において十分に勘案し、来年度の日本国際理解教育学会第11回大会（筑波大学で開催予定）において、発会のための会合を開きたいと存じます。詳細につきましては、決定次第、会員の皆様にご連絡いたします。

会の発足に関し、まだ十分に検討の至らない点が数多くあるかと存じますので、ご意見、不明な点などがございましたら、発起人までご連絡くださいますようお願いいたします。

(1) 院生連絡会への参加について

- ①名前（ふりがな）
- ②所属（研究科名及び修士または博士課程の別、もしくは在籍された研究科または現在の所属）
- ③メールアドレス
- ④研究テーマ、ないしは研究分野
- ⑤院生研究協議会に望むこと（会の名称ならびに発会のための会合についてのご意見・ご希望もお寄せください）
- ⑥学会に望むこと

(2) 発起人連絡先

野崎 志帆：nozaki@hus.osaka-u.ac.jp)

（名簿作成の都合により、野崎志帆宛てに、8月31日までに、ご連絡いただきますよう、よろしく願いいたします）

◆学会ホームページ開設のお知らせ

ホームページを開設しています。アドレスは以下の通りです。ご覧になってのご意見等を事務局までお寄せ下さい。なお、入会希望者がございましたらの、ホームページにある入会届をご利用下さい。

<http://www2.ocn.ne.jp/~kokusaig/>



## 事務局からのお知らせ

### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様関わった文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求める方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。また、ニューズレターなどで会員にもお知らせしたいと思っております。その際、助成金をいただいている公文国際奨学財団にも送りたいので、できましたら2部お送りくださるようお願いいたします。

### ◆卒論・修論の紹介のお願い

近年、大学生や院生が国際理解教育関係の論文を発表することが多くなってきております。本会報でも13頁にありますように卒論や修論を紹介したいと思っておりますので、氏名、論文名、学校名をお知らせ下さい。

### ◆住所・所属等変更の場合のお願い

最近事務局から郵送物を送りましても返却される場合が増えております。住所等に変更がありましたら、ファックスまたは、Eメールでお知らせください。

### ◆事務局オープンの曜日と事務職員交代のお知らせ

事務局は火曜日と木曜日の午前10時より午後5時までオープンしています。ご用の方はこの時間にご連絡下さい。なお、この他の曜日の場合でも毎日連絡が取れるようになっておりますので、留守番電話、ファックスまたはEメールでご連絡下さい。

平成11年度に事務局を手伝ってもらっていた小嶋繭子さんが都合により1月に辞めました。代って5月より坂田頭一君に手伝ってもらっておりますのでよろしくお願い致します。

### ◆名簿追補版のお知らせ

平成11年7月から会員になられた方の名簿を同封します。

### ◆年会費納入のお願い

当学会の活動のすべては会員の皆様の会費でまかなわれております。年会費未納の会員は会費をお支払いくださるよう宜しくお願い致します。

平成11年度以降の会費： 正会員：8,000円 学生会員：3,000円

団体会員：30,000円

・郵便振り込み 口座番号 00120-5-601555 (従来通り)

加入者名 日本国際理解教育学会

・銀行振り込み 富士銀行 中井支店(249) 普通預金

口座番号 1783886

名義人 日本国際理解教育学会

なお、平成10年度までは正会員の年会費は5,000円です。

### ◆事務局休業のおしらせ

8月～9月は大学の夏季休暇になっておりますので、事務局も休業いたします。しかし、週数回は事務局に出かけていますので、ご用の方は、FAX(03-5983-8132)またはEメール([kokusaig@oak.ocn.ne.jp](mailto:kokusaig@oak.ocn.ne.jp))にてご用件をお知らせ下さい。後日ご連絡いたします。

